KIMURA

サン・セザールの初夏 50×50 1979

特別展

木村忠太

1989年4月4日[火]—5月28日[日]

前期・後期に分けて作品を陳列いたします。

開館時間＝午前9時→午後5時（入館は4時30分まで）

休館日＝4月9日(日)・10日(月)・17日(月)・24日(月)
5月1日(月)・2日(火)・8日(月)～11日(木)・14日(日)・15日(月)・22日(月)

入館料＝一般個人200(160)円　小・中学生個人100(80)円（ ）内は20人以上の団体割引料金

渋谷区立松濤美術館

渋谷区松濤2-14-14 TEL.465-9421 渋谷駅下車徒歩15分 神泉駅下車徒歩5分

講演会
4月22日土午後2時～「木村忠太と会ったころ」　講師　河北倫明氏
5月13日土午後2時～「木村忠太の思い出」　講師　富山秀男氏

特別展

木村忠太

木村忠太は1917(大正６)年高松市に生まれ、1987（昭和62）年７月３日パリで70年の生涯を閉じました。1953年、画家36歳の時にフランスに渡って以後ついに日本に帰ることなく、パリに定住して制作活動を続けました。はじめボナールの影響を強く受けた木村は、渡仏後しばらくの摸索期間をへたのち、抽象性のつよい色面とデッサン風の線描を駆使した、独自の画風と方法論を確立するにいたりました。かれの関心は、抽象絵画のもつ自由さを失うことなくいかに自然を描きえるか、いいかえればいかに対象にとらわれることなく対象のもつリアリティを画面に定着させるかという問題にあったといえましょう。西洋の地にあって木村は東洋的な哲学と感性に開眼し、この問題を超克したといえます。このような木村の絵画は、1980年以降のパリ、グランパレ美術館でのＦＩＡＣ（現代美術国際フェア）における展観や、1985年ワシントン、フィリップス・コレクションでの展覧会開催などにより、現代における絵画のあり方にたいする一つの解答例として、海外において高く評価されております。また、かれの作品はフランス政府をはじめ多くの美術館等に買上げられています。

このたびの展覧会は、木村忠太の日本でははじめての本格的な展覧会となりますが、かれの画風が確立されたとみられる1965年から死にいたるまでの国内外の代表作約100点（油彩・パステル・デッサン）により、「光の画家」と称され「魂の印象派」と自負した木村芸術を展望しようとするものです。

坂の上の家 100×100 1981

講演会

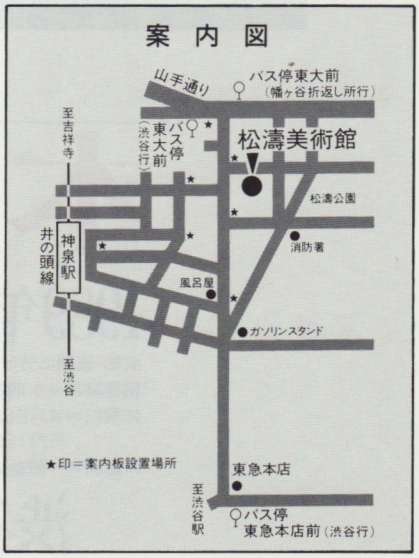
■1989年４月22日㈯午後２時～
「木村忠太と会ったころ」講師　河北倫明氏(美術評論家)
■５月13日㈯午後２時～
「木村忠太の思い出」講師　富山秀男氏(東京国立近代美術館次長)

映画会

■1989年４月23日㈰午後２時～３時「ルーブル美術館Ⅰ」
「ルーブル美術館Ⅱ」
■1989年５月21日㈰午後２時～３時「ルーブル美術館Ⅲ」
「ルーブル美術館Ⅳ」

美術相談

■1989年４月16日㈰午後１時～４時
講師　宮田翁輔(洋画)　遠藤原三(洋画)
■1989年５月28日㈰午後１時～４時
講師　磯村敏之(洋画)　荒井朝吉(日本画)



KIMURA